

【対象】男 17名 59.1 ± 7.4 女 11名
58.6 ± 8.3

【方法】入院初日, 10日目, 高精度体成分分析装置により筋肉量の変化を測定。

【結果】男女とも全員では, 有意な筋肉量の増加は認められなかった。男8名で有意に増加。59歳以下で筋肉量増加者は多かった。

【考察】有酸素運動のみならず, 低負荷のレジスタンストレーニングも有用。一日一万歩のウォーキング, ストレッチングとレジスタンストレーニングの20分程度でも筋肉量が増加する傾向がみられた。高齢者, 女性にも有効なトレーニング方法を検討していく。

【まとめ】壮年男性では, 筋肉量の増加が期待できる。

6 Urosepsis をきたした糖尿病の1例

伊藤 崇子・小林あかね・小林 千晶
鈴木亜希子・平山 哲・羽入 修
鈴木 克典・相澤 義房

新潟大学大学院医歯学総合研究科
内分泌代謝分野

症例は74歳男性。主訴は発熱, 意識レベル低下。

1982年に糖尿病と診断され内服治療を開始されたが血糖コントロールは不良であった。2003年3月の直腸癌手術後から神経因性膀胱を発症し, 間欠的自己導尿を開始した。2003年11月, 40度台に熱発したが, 3日間自宅に放置。意識レベルが低下したため緊急搬送。CT上急性腎盂腎炎と診断され入院。急性腎不全, DICを合併し, CHDF・PMXにて加療した。入院時の血液培養からは *klebsiella pneumoniae* が検出された。糖尿病患者では感染症の罹患率が高く, 死因の第3位を占めている。そのなかでも尿路感染症が最多であり, 平素から無症候性細菌尿を合併している患者が多い。予防的な抗生剤投与の効果については現時点では明確な evidence がない。神経因性膀胱を合併した無症候性細菌尿症例には, より厳格な血糖コントロールと有症状期早期の抗生剤投与

が不可欠と考えられた。

7 膿胸を繰り返した1症例

森川 洋・樋口 昇・渡辺 資夫
桑原 治・仲丸 司・鈴木 善幸
佐藤 幸示

県立小出病院

症例は70歳, 女性。55歳時に糖尿病と診断されその後, 近医にてインスリン注射にて血糖コントロールされていた。68歳時に外傷性くも膜下出血, その頃より痴呆出現し血糖コントロール不良となる。70歳時, 意識障害にて来院 (HbA1c 6.5%), 胸部レントゲン写真にて右肺の胸水を認めた。検査にて膿胸と診断しドレナージ・抗生物質にて治療した。

約1年後の72歳時, 呼吸苦にて再び来院 (HbA1c 11.5%), 胸部レントゲン写真にて左肺の胸水を認めた。検査にて膿胸と診断しドレナージ・抗生物質にて治療した。

約1年の間に両肺の膿胸を発症したコントロール不良糖尿病患者の1例を経験したので報告する。

8 新潟市における学校糖尿病検診の経過と問題点

菊池 透・長崎 啓祐・阿部 時也
川崎 琢也・田中 取・大川 賢一
庄司 義興

新潟市医師会学校糖尿病検診判定委員会

新潟市では, 昭和57年度から学校腎臓病検診時に尿糖検査を加え, 学校検尿糖尿病検診を開始した。学校保健法に尿糖検査が取り入れられた平成6年度以降は, 学校糖尿病検診検討委員会を設置し, メディカルセンターでの1次精検を開始した。平成15年度までに, 1次検尿をのべ1,231,662人を受診し, 1型糖尿病4名, 2型糖尿病44名, 境界型糖尿病16名が発見された。2型糖尿病の発見率は平成6年以降急増し, 小学生で10万人あたり約2名, 中学生は約14名であった。発症率の増加に加えて, メディカルセンターでの1次精検

が有効に機能したと推測された。中学校の2型糖尿病の発見率は1型糖尿病の7倍以上であった。発見された2型糖尿病は、1型比べて明らかに肥満傾向が強かった。今後の課題は、1次精検、2次精検未受診者をなくすこと、医療機関での2次精検での精度の向上等である。

9 新潟県における小児期発症1型糖尿病コホート調査報告～4年間の経過～

長崎 啓祐・菊池 透・樋浦 誠

小川 洋平・内山 聖

新潟大学大学院医歯学総合研究科

小児科学分野

新潟小児糖尿病調査委員会

新潟県小児期発症1型糖尿病コホート調査の4年間の結果を報告する。

【対象と方法】18歳以下の新規発症患児を、県内の小児科医あるいは糖尿病学会専門医が勤務する医療機関へのアンケート調査をもとに行い、主治医に対して各年毎に3ヶ月毎の身体計測値、HbA1c インスリン注射法や投与量などに対して、郵送によるアンケート調査を行った。

【結果】新潟県における15歳未満の1型糖尿病発症率は1.98人/10万人/年であり過去の日本の報告と変わりなかった。新規発症は女児の方が多く、小学校高学年から中学生が多かった。高校生の発症は少なかった。県内での地域差がみられ、佐渡、下越地方に多い傾向があったが症例の蓄積が必要である。学校検尿での発見が30%もあり、比較的早期に見つかっている症例が多かった。4年間の経過中に女児では中学生以降にHbA1cが悪化する症例が多くみられた。今後も引き続き調査を行っていく予定である。

10 小児糖尿病サマーキャンプにおける評価シートを用いた患者教育の試み

小川 洋平・菊池 透・長崎 啓祐

樋浦 誠・内山 聖

新潟大学大学院医歯学総合研究科

内部環境医学講座小児科学分野

【目的】小児糖尿病キャンプに参加した患児が統一された方法で指導を受けることにより血糖コントロール・QOLが改善することを明らかにする。またキャンプを通しての教育効果を評価シートで客観的に評価できるか明らかにする。

【方法】対象は第22回新潟小児糖尿病キャンプ参加患児16名(男子7名女子9名)。患児を4グループに分け、それぞれにチーフ医師を割り当てた。各チーフ医師は統一した評価シートを使用し、各項目(食事療法、自己注射手技、低血糖時の対応、集団行動等)ごとの評価を行った。それにより指導すべき事項を明確にし、重点的に指導した。キャンプ前半と後半の評価シートのスコアを比較した。

【結果】各項目とも有意な差は認めないが前半より後半のスコアが改善している傾向があり、キャンプ初参加者においてより強かった。

【考案】非専門医であっても統一した方法で指導にあたれば、血糖コントロール・QOLが改善することが予想される。

11 DM 食事の振り返り外来のまとめ

清水マチ子

舟江病院

今年は果物、油、塩分 について、アンケート形式で記載してもらい、その後改善するための学習プリントを渡した。今回は3種類のとりかたの実態をまとめてみた。果物は各季節毎に良く食べるものの量と果物をとる頻度を調査。68%が毎日果物を食べており、少なめは西瓜とイチゴで、多めはメロン、柿、りんごであった。油はパン、サラダ、野菜炒め、揚げ物のとりかたを調査した。パンにはバターマーガリンをつけている人が多く、サラダはマヨネーズとノンオイルドレッシングが